

国立霞ヶ丘競技場の八万人規模ナショナルスタジアムへの再整備等に向けて（決議）

国立霞ヶ丘競技場は、昭和三十二年（一九五八年）に東京で開催された「第三回アジア競技大会」のメインスタジアムとして、「明治神宮外苑競技場」（大正十三年（一九二四年）完成・建設当時東洋一）を取り壊して新たに整備されたものである。翌年のオリンピックの東京開催決定後には拡張工事が行われ、昭和三十九年（一九六四年）には、アジアで初の「第十八回オリンピック東京大会」のメインスタジアムとしても使用され、その開会式は今も多くの国民にレガシーとして刻まれている。

国立霞ヶ丘競技場のある明治神宮外苑は、首都・東京の中心に位置し、鉄道・道路の交通利便性が高く、都心有数の立地条件にある。新宿御苑や赤坂御用地など都心の広大な緑とともに都心の「オアシスベルト」の一角を形成し、都会の文化性と自然のうるおいが共存する環境でもある。オリンピック東京大会の終了後も、国立霞ヶ丘競技場では、昭和四十二年（一九六七年）の「ユニバーシアード東京大会」をはじめ、ラグビー大学選手権大会、ラグビー日本選手権大会、天皇杯全日本サッカー選手権大会、全国高等学校サッカー選手権大会、サッカートヨタカップなど、国内外の様々なスポーツ大会が開催されてきた。また、明治神宮外苑には、秩父宮ラグビー場や明治神宮野球場など多様なスポーツ施設が点在しており、国立霞ヶ丘競技場を中心に日本のスポーツの聖地として国民に親しまれてきた。

しかしながら、国立霞ヶ丘競技場は昭和三十二年（一九五八年）に完成してから半世紀を経て老朽化が激しく、今日の世界各国のナショナルスタジアムと比較すると、収容規模、選手環境、ホスピタリティ、バリアフリー、IT環境などあらゆる面で著しく劣った状況にある。また、秩父宮ラグビー場（昭和二十二年（一九四七年）完成）や明治神宮野球場（大正十五年（一九二四年））等も同様である。このため、今後、首都・東京において開催されるスポーツの大規模な国際競技大会、特に平成三十一年（二〇一九年）のラグビーワールドカップ日本大会において、これらの競技施設をメインスタジアム等として活用することは、現状において極めて困難であると言わざるを得ない。

スポーツは世界の人々に大きな感動や楽しみ、活力をもたらすものであり、世界共通の文化の一つである。我が国がワールドカップ等の国際競技大会を開催することは、スポーツの振興、国際交流の推進、地域の活性化、観光の推進など、明るく豊かで活力に満ちた社会を形成する上で極めて重要である。

日本のスポーツのレガシーとして未来へ継承し、平成三十一年（二〇一九年）に開催するラグビーワールドカップ日本大会をはじめ、首都・東京で今後開催予定の大規模な国際競技大会のメインスタジアムとして活用するべく、国立霞ヶ丘競技場を八万人規模のナショナルスタジアムとするなど、明治神宮外苑地区の都市計画や周辺環境整備を含めて早急に検討を行い一帯のスポーツ施設を再整備すべきである。

右決議する。

平成二十三年二月十五日

ラグビーワールドカップ二〇一九日本大会成功議員連盟

会長 西岡 武夫
顧問 横路 孝弘
顧問 江田 五月
顧問 安倍 晋三
顧問 福田 康夫
顧問 麻生 太郎
顧問 鳩山 由紀夫

副会長 井上 義久
副会長 園田 博之
副会長 下地 幹郎
副会長 重野 安正
副会長 浅尾 慶一郎
副会長 穀田 惠二
副会長 樽床 伸二
幹事長 遠藤 利明
事務局長 石森 久嗣

国会ラグビークラブ

顧問 森 喜朗
会長 中谷 元